

旅客ターミナル、改修中も運用を継続 *Yokota Passenger Terminal renovation doesn't stop operations*

October 16, 2020

Staff Sgt. Kyle Johnson
374th Airlift Wing Public Affairs

軍人とその家族を乗せたシアトル発の飛行機が横田基地の旅客ターミナルに到着した時、本州ではひと月ほど雨が降り続いていた。

洪水になるほどではない、傘をさせばよい程度の雨が、日常生活で聞こえてくる全ての音を消していた。

航空機が給油と物資の積み込みを行う間、乗客が仮設の出発ターミナルに降り立つと、防水シートに落ちる雨音は、水たまりにブーツを踏み入れて跳ね返る水の音で消えた。

狭い座席で12時間も移動した後、マスクをしたまま会話しようとする人などはほとんどいないようだった。フードトラックがターミナルドアの前の駐機場場に車を寄せ、新しい客にサービスを提供する準備を始めた。

隣にある、もとの旅客ターミナルは全周が白い壁で覆われ、外側から工事の様子が見えなくなっていた。

建物は必然的に老朽化し、設備が劣化するのは避けられない。それによってある時点で、横田旅客ターミナルは改修工事を行わなくてはならない。休みなくミッションを遂行する中で、必要なサービス業務を、ほとんどもしくは全くミッションに影響を与えず、一時的に仮の場所へ移すにはどうすればよいのかを見極めるのは、旅客ターミナルのリーダーシップの判断にかかっている。

「工事が行われることは分かっていた。だがその後、新型コロナウイルス感染症の問題を受け、計画を変更せざるを得なかった。その結果仮設のターミナルを拡張しなくてはならなかった」と第730航空機動中隊旅客エージェントのジェームズ・ブラード上級空兵は言った。

新型コロナウイルスがあらゆる影響をもたらす世界を揺るがす直前に、ターミナルは本館の改修と仮設の建物の設立工事を開始した。2年間の工事のプロジェクトは順調に進んでおり、第730航空機動中隊は現在、元のターミナルビルに隣接して建てられた3つの仮設の建物で運用を行っている。

3つの建物は、出発ゲート、到着ゲート、メインターミナルで構成されている。それらは、別々の建物になっていて、(違う目的で移動する者同士が)同時に交わることはない。一つの集団が、雨宿りをしながら、次の目的地に向かう飛行機の準備が整うまで、出発ターミナルで待っていた。横田を出発する際は、メインターミナルでチェックインし荷物を預けてから、出発ターミナルに向かい、搭乗準備をする。

最終目的地が横田の場合は、到着ゲートのみで移動が制限される。ここでは、歓迎のブリーフィングと新型コロナウイルス感染症のスクリーニングを受けた後、スポンサーや部隊と個人的に接触することなく、移動制限の場所に直行する。

「旧ターミナルでは、(スタッフ同士が)手を振って話をするのができたが、(この仮設ターミナルでは)皆別の建物にいたので、無線でコミュニケーションを取らなくてはならない」と第730航空機動中隊旅客サービス係のエマニュエル・ロメロー等空兵は述べた。

建物間の人の移動を調整しながら、到着と出発のグループ間の接触をなくし、効率的に移動させることは至難の業だった。それでも、仮施設での運用を2年間行うことを想定しているため、対策を講じる必要があった。

「我々がこの仮設で働くようになって、約90日が経つ。これまでのプロセスを評価し、振り返るには今がちょうど良い時期だ。我々は日々、プロセスを向上させる方法を考えているので、ぜひICEコメントを送って欲しい。我々は前向きに検討する」と第730航空



機動中隊居客サービス下士官監督官のスティーン・バザール曹長は述べた。

仮設の建物で運用を行ってきた短い期間に、彼らは効率的なワークフローの支障となる幾つかの問題を特定し、対処してきた。この最も新しい例が、メインターミナルの後ろに組み込んで建てられた新しい積み込みドックで、出発機へ荷物を積む流れが合理化された。

空軍が2か月間停止していた移動の遅れを取り戻し、横田旅客ターミナルを週に千人以上の乗客が経由する中、今や仮設施設を運用する部隊の組織力が最も試されている時かもしれない。

乗客が太平洋地域の国に向かう際は、おそらく横田の仮設ターミナルを経由するだろう。

その時、第730航空機動中隊は準備ができています。